

パンフレット 2013年度せんだいメディアテークでの企画「一人ひとりのくらしの風景がみえてくるー牡鹿半島のくらし展ー」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-05-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東北学院大学文化財レスキュー班 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/328

一人ひとりのくらしの風景がみえてくる

——東北学院大学「牡鹿半島のくらし展」——

監修：加藤 幸治

編集：沼田 愛

活動主体：東北学院大学 民俗学実習文化財レスキュー班

発行日：2014年1月10日

発行：東北学院大学博物館

〒980-8511 宮城県仙台市青葉区土樋一丁目3-1

Tel: 022-264-6920

Url: <http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/>

牡鹿半島のくらし展 in 鮎川

2013年8月13日(火)～15日(木)

旧牡鹿公民館跡地

牡鹿半島のくらし展 in 石巻

2013年11月3日(日)～4日(月・祝)

宮城県慶長使節船ミュージアム(サン・ファン館)

牡鹿半島のくらし展 in 仙台

2014年1月10日(金)～13日(月・祝)

せんだいメディアテーク

東北学院大学

一人ひとりの くらしの風景が みえてくる

——牡鹿半島のくらし展——

すくう | 03

●文化財レスキュー始動！

のこす | 04

●津波による汚染物の
クリーニング

●殺虫処理と脱塩作業

●作業過程の記録

●資料の避難と

仮設収蔵庫での保管

つなげる | 08

●2012年「文化財レスキュー展 in 鮎川」

●2012年「文化財レスキュー展 in 仙台」

●2013年「牡鹿半島のくらし展 in 鮎川」

●老人ホームやデイサービスでの聞き書き

●牡鹿・鯨まつり復活祭での活動

●2013年「牡鹿半島のくらし展 in 石巻」

●モノとつながるエピソードのデータベース

●ごあいさつ——— 02

●これから活きる被災文化財——— 14

ごあいさつ

東日本大震災から3年10カ月が経過しようとしています。震災一年目のあの困難な毎日、行く先の見えないなかで復興への思いだけが先走っていた二年目、停滞感があせりへとつながりつつもそれが日常化してきている三年目、わたしたちはそれぞれの毎日を歩んできました。今ほど、「私たちのくらしはどのようにかたち作られ、どこへ向かっていくのか」をみずからの問題として考えたことは、かつてなかったのではないのでしょうか。

3・11以降、国立博物館や全国の文化財関係者、さまざまな分野の研究者を動員して文化財レスキューが行われてきました。宮城県内の現場は50カ所を超える甚大な被害でしたが、現在は被災現場でのレスキューからコレクションの保全・復旧、そしてミュージアムの再興へと作業が移っています。

東北学院大学では、大学博物館を拠点として、牡鹿半島に所在していた石巻市鮎川収蔵庫の考古・民俗資料のコレクションを受け入れました。現地から運び込まれた量は、4トントラックで8回分。大破したコレクションのクリーニングと保全作業は、学生たちの力で進められてきました。資料が安定した状態になるには、あと一年ほどの作業が必要と見込まれています。

現在、私たちが取り組んでいるのは、「牡鹿半島のくらし展」というプロジェクトです。これは被災して仙台でお預かりしている資料を、地域の方々に見ていただく展覧会の形式をとっていますが、実は身近な民俗資料がどのようなくらしのなかで使われたかをインタビューによって調査することが目的です。レスキューされた古い生活資料が、今を生きる私たちと思い出を介して一本の糸でつながる。そのつながりの糸を何百本にも増やして束にしたとき、「ひとり一人のくらしの姿」が見えてくるはず。

町が復興し、人々が仮設住宅から復興住宅に移ったあと、ふとかつてのくらしに思いをはせてみたくなる時期がくるでしょう。そのときにミュージアムは真価を問われるはず……。

堅苦しい話はさておいて、なつかしいくらしの道具からはじまる、みなさん一人ひとりの「物語り」を聞かせてください。

東北学院大学文学部歴史学科准教授 加藤幸治



すくう

文化財レスキュー始動！

東日本大震災で被災した博物館や自治体のコレクションは、被災文化財等救援委員会が組織するレスキュー隊によって現地で回収され、仙台市や東京ほか全国の博物館で一時的保管・保全作業が進められてきました。

「石巻市鮎川収蔵庫資料」もそのひとつで、旧牡鹿町域で収集された牡鹿半島のくらしの民具が大半を占めます。

8.8メートルの津波で壊滅した収蔵庫から、4000点あまりの資料が回収され、東北学院大学に運び込まれました。



写真上から：●津波で被災した鮎川収蔵庫／●炎天下のなかの救援作業／●隣接する体育館に資料を一次退避

はくぶつかん
博物館もたくさん
被災したけど
多くの文化財が
なが
流されずに
のこったんだね！



“フジカくん”



東北学院大学文化財レスキューチームの公式!?キャラクター
捕鯨のまち鮎川で生まれ、牡鹿半島のくらしに興味をもっている

のこす

津波による汚染物の クリーニング

鮎川収蔵庫から搬出された民俗資料は、東北学院大学の学生が中心となって、汚れやカビを落とすクリーニング作業をほどこしました。

作業は、大まかに汚れやカビなどを落とす応急処置的な段階（一次洗浄）と、細部の汚れやカビの再発、虫害・塩害に対処する段階（二次洗浄）にわけられます。

クリーニング作業は2011年7月から2012年3月まで他大学のボランティアを含めてのべ900人が参加して行われ、資料の劣化を防ぐことができました。

写真上から：●大学生によるクリーニング作業／●資料の
状態や汚れに合わせて洗浄の方法を変える



しりょう みらい
資料を未来に
のこす
残すために
きれいにしたんだね！



のこす

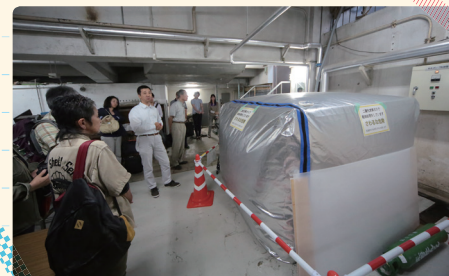
殺虫処理と脱塩作業

津波で被災した文化財は、救出されるまでに3カ月にわたって野ざらしでした。そのため、カビや虫食いによる劣化が進んでいました。また、泥まじりの塩水に浸かるという、通常の博物館の資料には起こりえないような状態にありました。

これらの状態を改善するため、作業員にも資料にも安全性の高い二酸化炭素殺虫処理と脱塩作業を大学内で行っています。こうした作業を学生が行うことは稀ですが、文化財保全の勉強にもなっています。

写真上から：●特殊な袋に二酸化炭素を充填させて殺虫処理／●国立民族学博物館で講習を受ける学生たち／

●保存処理を終えて展示された資料(国立民族学博物館企画展「記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産—2012年より」)



げんち すく
現地で救った
あとのしごとか
たいへんだね！



作業過程の記録

[illegible]

文化庁レシキョーカル (石巻市山田町)	
氏名 山田 太郎 住所 石巻市山田町1-1-1	電話番号 0133-1234567 受付番号 123456789
現 状	☐ 現在 ☐ 過去 ☐ 現在 ☐ 過去
	☐ 現在 ☐ 過去 ☐ 現在 ☐ 過去
	☐ 現在 ☐ 過去 ☐ 現在 ☐ 過去
	☐ 現在 ☐ 過去 ☐ 現在 ☐ 過去
	☐ 現在 ☐ 過去 ☐ 現在 ☐ 過去
机 関 内 容	☐ 現在 ☐ 過去 ☐ 現在 ☐ 過去
	☐ 現在 ☐ 過去 ☐ 現在 ☐ 過去
	☐ 現在 ☐ 過去 ☐ 現在 ☐ 過去
	☐ 現在 ☐ 過去 ☐ 現在 ☐ 過去
	☐ 現在 ☐ 過去 ☐ 現在 ☐ 過去
機 関 の 機 能	☐ 現在 ☐ 過去 ☐ 現在 ☐ 過去
	☐ 現在 ☐ 過去 ☐ 現在 ☐ 過去
	☐ 現在 ☐ 過去 ☐ 現在 ☐ 過去
	☐ 現在 ☐ 過去 ☐ 現在 ☐ 過去
	☐ 現在 ☐ 過去 ☐ 現在 ☐ 過去

資料の避難と 仮設収蔵庫での保管

A photograph showing three people in a workshop setting. Two individuals in the foreground, wearing dark blue tracksuits with red stripes, are kneeling and working on a large, empty wooden barrel. A third person, wearing a black jacket and a white face mask, is standing behind the barrel, also working on it. The floor is covered with various items, including a large white plastic bag, a blue box, and some smaller containers. In the background, there are shelves and other equipment.

つなげる

2012年 「文化財レスキュー展in 鮎川」

被災した民俗資料は破損が激しく、用途がわからないものも数多くあります。しかし、資料を活用するためには、使用場所や年代といった基本的な情報が必要です。

そこで、住民から使用方法といった資料にまつわる情報を提供してもらうために、展覧会を企画しました。

1回目となる「文化財レスキュー展in 鮎川」は2012年8月12日から3日間、鮎川の旧牡鹿公民館で開催し、来場した約150名に東北学院大学の学生がインタビューを行いました。



しりょうのこ
資料が残っている
だ！ナで！は
だめなんだね！



写真上から：●取り壊し前の公民館を利用した展覧会／●来場者にインタビューをする学生
●展示案内チラシ

つなげる

2012年 「文化財レスキュー展in 仙台」

2012年11月6日から8日まで、せんだいメディアテークを会場に、「文化財レスキュー展in 仙台」を開催しました。

これは、牡鹿半島から仙台市内に移って避難生活を送っている人びとも、資料にふれてもらうことを意図したものです。すべての資料を展示する大規模な展覧会で、3日間で2200名以上が来場しました。

資料にまつわる思い出をめぐって会話がはずむなど、民俗資料が来場者同士の交流のきっかけになっているようすが伺えました。



ひと
たくさんの人に
みってもらうことで
じょうほう ふえ
情報が増えていくよ！



写真上から：●会場には救出したすべての民俗資料を展示した●資料の使い方をめぐって初対面同士で話が盛り上がる●展示案内チラシ

つなげる

2013年 「牡鹿半島のくらし展in 鮎川」

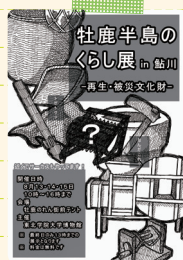
2013年8月13～15日、前年に引き続いて被災文化財をもとあった鮎川に持ち帰って展示し、エピソードを語ってもらう展覧会を再び実施しました。

しかし、前年に会場とした牡鹿公民館は取り壊されたため、テントでの仮設展示となりました。

展示を見るためにわざわざ足を運んでくれる方も多く、捕鯨の仕事のために戻ってきたという方が用具の説明を詳しくしてくれたり、前年にはないほど活況を呈し、今後の活動に弾みがつきました。



写真上から：●更地にテントを立てての展示の様子／●農具をまえに昔の苦勞ばなしに花を咲かせる／●ベテランの方から捕鯨のお話を聞く／●展示案内チラシ



たの 楽しく語りあうと、
かた むかしのくらしが
おも 思いうかぶんだらうね！



つなげる

老人ホームや デイサービスでの聞き書き

鮎川には老人ホームとデイサービスがあり、そこへも大学生が民具を持って訪問し、昔のエピソードをうかがいました。100歳以上の方が何人もおられ、昭和初期の鮎川について実にいきいきとお話いただきました。古い写真を見せてくれる方もありました。こうした活動は「回想法」といって、頭の体操の効果も期待されます。

また鮎川にある捕鯨会社にお邪魔し、現在の捕鯨の状況や今後の見通しなどについて詳しく教えていただきました。



写真上から：

- 捕鯨会社での聞き書き
- デイサービスでの聞き書き

じんせい だい
人生の大せんはいたちは、
くらしのイメージを
つた
はっきり伝えてくれたよ！



つなげる

牡鹿・鯨まつり復活祭での活動

2013年10月13日、牡鹿・鯨まつり復活祭が行われました。当日の朝は震災後はじめて観音寺でクジラの供養のための法会が行われ、同時に震災犠牲者の供養も行われました。

会場では小中学校や地域の様々な団体による芸能や舞踊、タレントのショーなど盛りだくさんでした。なかでも捕鯨会社が提供したクジラ炭火焼はたいへん喜ばれ、クジラが身近な鮎川のくらしを再認識する一日でした。会場にはレスキューした資料の中から捕鯨用具を展示し、お話をうかがいました。

●上2枚：さまざまな団体の出しもので賑わう会場／●中：観音寺境内には、戦前の鯨供養塔や沈没した捕鯨船の死者記念碑などがある／●下：ツチクジラの炭火焼2000食は大人気！学生も無料配布のお手伝い。



まち
クジラの町・
あゆかわ
鮎川ならではの
まつり
お祭りだね！

つなげる

2013年「牡鹿半島のくらし展in石巻」

2013年11月3日と4日には、石巻市の慶長使節船ミュージアム「サン・ファン館」を会場に展覧会を開催しました。再開館に合わせて多数のイベントが開催され、私たちの会場にも県内外から多くの来場者がありました。

展示には幅広い年齢、出身の方々が立ち寄って、資料や昔の生活にまつわる話を楽しそうに語ってくださいました。学生が集めた情報からは、資料の使い方だけではなく、その背景にある人びとのくらしを思い描くことができます。

写真上から：●資料ひとつひとつを丁寧に観察する来場者／●家族連れも多く訪れた／●資料を使ったころの思い出を友人同士で語り合う



しりょう
資料をのこしていくために
だいせつ じょうほう
大切な情報が
あつま
どんどん集っていくね！

つなげる

モノとつながるエピソードのデータベース

被災文化財をもとに話を伺って作成した「聞き書きシート」は600枚に達しようとしています。内容は、語った人がどの民具を見て何の話題を語ったか、そこからどの話題に関連していったかを意識して記録しています。また楽しそうに語ったのか、つまらそうに語ったのかも記しています。

一人ひとりにとっての民具との関係を紡いでいくような、そんな聞き書きデータを蓄積し、それをコレクションの台帳と結ぶデータベース作成を模索しています。

写真上から：●調査の夜はデータ共有をしてから聞き書きシートを作成する／●作成中のデータベース画面●聞き書きデータを民具研究者と共有する（日本民具学会平成25年度研究会にて）



モノのデータとおしゃべりのデータを、どう結びつけて記録できるかな？



これから活きる被災文化財

被災して別の場所に一時保管されている文化財は、徐々に地域に戻り始めています。そして数年のあいだに博物館が再興されるでしょう。また、多くの人々が復興住宅に入居できるようになると、公民館などの生涯学習施設も再建されていくでしょう。町はハード面では復興に向かい、生活の不便さは今よりも改善されていくでしょう。

しかし、これからも被災地でくらししていくことを選んだ人々にとって、被災前のくらしの思い出だけでなく、過去の人々がどのような生活を営んでいたかといった、いわば「くらしのイメージ」を必要とするのではないのでしょうか。過去と現在を結び付けて自分の位置を確認することは、これからのくらしを営んでいく道筋を見出すことにつながるはずです。

私たちの活動は、そうしたことを念頭に置いています。被災した文化財が、現在の人々の記憶と結び付いていくことで、地域の文化創造の材料となっていくための、橋渡しをする活動がこの民具のバックデータ収集活動です。

現在は大学生が地域の方々にお話をお伺いすることで、記録を増やしていますが、いずれは地域のみなさんが自分たち同士でこうした地域の魅力発見につながる活動をしていただき、大学生はそのお手伝いをするようなかたちになるといいと思います。

鮎川収蔵庫の文化財が石巻市に帰るまで、あと一年。文化財を物理的に守り伝えるための保全作業と、文化財を今の私たちにとって意味のあるものにするためのエピソードの聞き書きに、精一杯取り組んでいきたいと思っています。

ふんかざい
文化財が
ちいき
地域の
やく
お役にたつの
これからだよ！

